平成１５年度　厚生労働科学研究費補助金
政策科学推進研究事業

社会福祉士専門職教育における
現場実習教育に関する研究

平成１５年度　総合・総括・分担研究報告書

社団法人　日本社会福祉士養成校協会

平成１６年３月

目　次

はじめに　i

第１章　現場実習における学生のコンピテンシーに関する研究　Ⅰ-1

第２章　社会福祉士養成校教員並びに十周差貴施設・機関の実習指導者に対する学生コンピテンシーに関する研究　Ⅱ-1

（１）養成校教員に対するコンピテンシー調査の概要

（２）実習先施設職員に対するコンピテンシー調査の概要

第３章　実習スーパービジョンのミニマム・スタンダードに関する研究　Ⅲ-1

おわりに　i

はじめに

藤林　慶子（東洋大学）

（１）研究の背景

社会福祉士が国家資格となってから１０年以上が経過した。少子高齢社会の到来に伴い、国民全般を対象とする社会福祉を推進するため、これを担う社会福祉士の活動に期待が高まっており、そのサービスの質の確保が大きな課題となっている。近年、社会福祉士養成校の新設や改組転換が急増し、社会福祉士養成校の量的拡大は進んでいるが、その教育内容は各養成校や大学等にまかされている状況にあり、社会福祉士の専門職養成として教育システムは未だ十分とはいえない。国民の期待に応えた福祉専門職の養成は急務であり、とりわけ実践的能力の高い社会福祉士育成のためには、現場実践を通じて学ぶ社会福祉援助技術現場実習指導の教育内容の整理、教授法の標準化、教員の養成力の強化等に取り組むことが緊急の課題となっている。

社団法人日本社会福祉士養成校協会は、社会福祉士教育の向上を図るために平成１３年６月に法人化が認められた。この目的を達成するために、社会福祉士養成校における社会福祉援助技術現場実習指導の教育内容および現場実習のあり方を研究し、社会福祉士養成教育内容のシラバスの検討や教授法開発を通じて、社会福祉専門職養成教育と社会福祉士の専門性の向上に寄与するものと考える。

（２）研究の目的

少子高齢社会を迎え、国民の生活は多様化し、人々の福祉ニーズも様々に変化している。このような状況において、社会福祉専門職である社会福祉士の質を向上することは重要である。そして、社会福祉士の資質が向上し、その活動が国民の様々な生活問題に的確に対応できることによって、国民の福祉の向上にも寄与し、社会福祉士の質の向上は２１世紀のわが国における重要な課題である。

本研究の目的は、社会福祉士養成校における社会福祉援助技術現場実習の教育内容の質的向上のための研究を行うことにより、実習前後のスーパービジョン体制や学生の評価システムについて調査・分析し、わが国の状況に合致した社会福祉士専門職養成の実習体制を検討して、新たなスーパービジョン・システム並びに学生評価システムを構築することにより、社会福祉専門職の質の向上を図ることである。社会福祉専門職は、今

後益々その活躍が期待されている職種であり、本職種の質の向上を検討することを通じて、社会福祉関連制度の政策課題も明らかにしていくことを第二義的目的とする。

社会福祉が対人援助サービスを通じて国民の生存権や幸福追求権を保障するものであることから、社会福祉専門職の質を向上させるためには、早急に教育内容やシステムの整備が必要な分野となっていることからも本研究の必要性は強調できるものである。また、本研究によって期待される成果としては、新卒の社会福祉士であっても、利用者のニーズに応えることができるスキルを身につけ、利用者によりよい社会福祉サービスを提供することができるようになり、社会福祉士教育の質が向上することにより、社会福祉士という専門職の理解が促進され、福祉専門職に関する国民への認知度も増し、福祉人材育成の必要性についての国民の理解が得られること等が考えられる。

（３）研究方法・経過

本研究は、社団法人日本社会福祉士養成校協会における実習委員会等を中心に研究を行う。また社団法人日本社会福祉士会会員校教員を研究協力者として、社会福祉援助技術現場実習のあり方や学生評価についての研究を行った。

本研究は、学生の実習前後の評価システムとしてのコンピテンシーに関する研究を行うコンピテンシー班と学生への養成校教員が実施する実習スーパービジョン班の２班を構成して、研究を行った。

初年度は、コンピテンシー班では、①社会福祉援助技術実習における学生評価項目の検討、②実習指導者への BEI(Behavior Event Interview)調査の実施、③学校担当者へのフォーカスグループ、ブレインストーミング調査の実施、④コンピテンシー調査票における項目素案の検討を行った。産業界においては、各企業ごとにコンピュータによってコンピテンシーを把握する事業が実際に行われ、評価基準として運用されていることから、これらのノウハウを活用して、コンピュータによる学生の実習評価作成のために、フォーカスグループ、ブレインストーミング等の手法を用いて、養成校教員の側から見た実習生の特性を抽出し、BEI(Behavior Event Interview)調査によって、実習指導者からみた実習生の特性を抽出した。それらの項目から、実習生のコンピテンシー調査票素案を検討した。

スーパービジョン班では、①養成校におけるスーパービジョンのエキスパートへのヒアリング調査、②分担研究者、研究協力者所属機関におけるシラバス、スーパービジョンの実施状況、課題等のヒアリング、③スーパービジョンに関する国内外の文献サーベイ並び

に文献収集を行うとともに、次年度以降の調査実施のための調査項目の検討を行った。

第二年度である本年度は、コンピテンシー班では、前年度に作成した評価項目案を再度検討し、コンピテンシー調査票案を作成した。作成した調査票案は、何回かのフォーカスグループや主任研究者、分担研究者等の検討を経て、「社会福祉援助技術現場実習のコンピテンシーに関する調査票案（Ver. 3）として、社会福祉士養成校協会加盟校のうち、研究協力者、分担研究者、主任研究者の養成校において、プリサーベイを実施した。また、調査を①養成校教員、②社会福祉援助技術現場実習配属施設・機関の実習指導者にも実施し、各項目の検討を行った。

スーパービジョン班では、①実習スーパービジョンのミニマム・スタンダードの内容について検討し、研究班において実習スーパービジョンのミニマム・スタンダード案を作成した。②社会福祉士養成校において5年以上の社会福祉援助技術現場実習に携わっている教員に対して、アンケート調査を実施した。

（4）研究班組織

本研究を実施するにあたっては、養成校協会の加盟校教員が主任研究者、分担研究者、研究協力者となった。

五十音順

主任研究者	米本　秀仁	北星学園大学
分担研究者	岡田　まり	立命館大学
分担研究者	川上　富雄	川崎医療福祉大学
分担研究者	北本　佳子	城西国際大学
分担研究者	高山　直樹	東洋大学
分担研究者	中島　修	日本社会事業大学
分担研究者	西原　香保里	愛知みずほ大学
分担研究者	藤林　慶子	東洋大学
分担研究者	宮城　孝	法政大学
分担研究者	湯浅　典人	文京学院大学
分担研究者	横山　豊和	新潟医療福祉大学

研究協力	池田　雅子	北星学園大学
研究協力	石綿　二三代	上智大学
研究協力	鈴木　摩郁	東洋大学
研究協力	中谷　陽明	日本女子大学
研究協力	西原　留美子	東海大学
研究協力	野島　靖子	立教大学
研究協力	丸山　仁	新潟青陵大学

第１章　現場実習における学生のコンピテンシーに関する研究

藤林　慶子（東洋大学）

（１）研究の背景

2003 年８月 25 日の日本経済新聞に企業においてコンピテンシー評価制度が広まっていると紹介された。企業におけるコンピテンシーについては、昨年度の本研究において概略を述べたが、現在わが国の企業においてコンピテンシー評価制度そのものがどのように評価されているかを知ることは重要であると思うので、最初に記事の概略を述べたい。同紙では、コンピテンシーを「米国で生まれた人事評価の手法で、行動特性と訳されることが多い。高い業績を上げた社員の行動や発想の特徴を抽出して分類しておき、それらの項目に沿った行動をしているかどうかを評価する。能力開発の目標にする場合もある。数字や成果による評価と組み合わせて利用する場合が多く、バランスととれた人材の選抜に有効とされている。」と定義した上で、本文においてコンピテンシーは「販売実績など結果だけを評価するのではなく、社員の行動や意識をきめ細かく把握できる特徴」があるとしている。また、昨年度の報告書でも述べた 360 度フィードバックについても触れており、「社員の行動の特徴を把握することで、公平で透明性の高い評価」を行う際のツールとして紹介し、サッポロビール、曙ブレーキ工業、ＢＭＧファンハウス、ＮＥＣ、富士ゼロックスなどにおける取り組みを紹介している。最後に、人材関連のコンサルティング会社、マーサー・ヒューマン・リソース・コンサルティングの舞田竜宣シニアコンサルタントの談話として「人事評価制度は『成果が上がったから評価する』から『成果を上げるために支援する』段階に進んでいる。コンピテンシーも今後、人材選抜の道具から人材育成の手段へと活用法が広がるだろう」と指摘している。

上記の記事においてコンピテンシー評価制度は、①　単なる評価ではなく社員の行動や意欲等を細かく把握できる、②本人自身、上司、部下等が評価に参加することから、客観的な評価ができる、③人物評価について、偏った把握の仕方、独自の評価方法等を客観的に理解することできる、④その人自身が成果を上げるために有用である、という特徴を有していると整理できる。この考え方は社会福祉現場実習においても有用であり、①実習に行く学生の行動や意欲等を細かく把握し、②本人自身、実習先スーパーバイザー、実習担当教員等からの客観的な評価ができ、③評価自体に客観性をもたせることができ、④実習前後の評価を行うことで、実習生自身が成果を上げるために活用できる、と考える。社会

福祉現場実習だけではなく、医学教育、看護教育等においても、コンピュータを利用したコンピテンシー（行動特性）の活用は有用であると考える。

（２）研究の目的

本研究は、社会福祉援助技術現場実習の質の向上を図ることを目的として実施した。社会福祉援助技術現場実習を履修する模範となる学生の行動を想定し、コンピテンシー項目を明らかにすることを第二義的目的として実施した。

（３）調査の方法

コンピテンシー項目の再検討にあたって、実習を履修する学生に対し各項目への回答と意見を問うプリサーベイをＡ社会福祉士養成校において実施した。その後、その結果を踏まえ、主任研究者、分担研究者、研究協力者等とのフォーカスグループにおいて検討を重ね、調査票 Ver.3 を作成した。本調査票を分担研究者、研究協力者の所属校において実施した。その結果は、以下のとおりである。

・調査対象：社会福祉士専門教育における現場実習教育に関する研究において、担当している教員の所属する大学の学生。なお、調査対象機関は、研究協力者の所属大学等とした。

・実施期間：平成１５年１１月～平成１６年１月

・実施方法：調査票を学生へ配布し、回答後直接回収

・調査の内容：【参考資料－１】

表－１に示す５つの分野におけるスキルおよびコンピテンシーの評価項目において、自己評価形式で自分の達成度を評価（５段階基準＋未回答）

また、自己の評価に加えさらに、評価項目の立て方およびその設問文の理解の困難度合についての調査も併せて実施（４段階基準）

回答のあった分析の対象となる大学名とそのサンプル数を整理したのが表－２である。

表－1　調査内容の調査項目大分類

	分類名	設問数
A	基本的・社会的能力	6
B	実習準備態勢	7
C	実習計画並びに実習計画の実行など	8
D	ソーシャルワークコンピテンシー	7
E	ソーシャルワーク実践プロセス	9
F	書く・話す・聴く・観察する技能	9
	合　計	46

表－2　分析対象の大学名とその対象人数

大学名	回収数（人）
東洋大学	83
上智大学	18
北星大学	175
立命館大学	114
立教大学	71
東京国際大学	41
川福大学	87
愛知みずほ大学	36
新潟青陵大学	13
東海大学	5
合　計	643

また、分析にあたっては、以下の視点から実施するものとする。

（1）調査項目分類における評価の傾向の把握

（2）属性要素（性別、学年、実施前／中／後、実施施設）における評価の傾向の把握

（3）再検討項目（回答しづらい項目や理解しづらい項目など）の抽出

（4）自由意見による調査に対する具体的意見の分析

（4）調査結果

1）調査項目分類における評価の傾向

各評価項目における評価基準（達成レベル）を表－3の換算表に従い点数化を行い定量的分析を行った。

表－3　評価基準の点数換算表

評価基準（選択肢）	評価点
レベル1：実習生（自分）は、項目の目的をほとんど理解していないし、それを実践できない。	1
レベル2：実習生（自分）は、項目の内容を理解しているが、それを実践できない。	2
レベル3：実習生（自分）は、項目の内容を理解しており、それを適切に実践する努力をしているが、もっと訓練が必要である。	3
レベル4：実習生（自分）は、項目の内容を理解し、意識的に実践している。	4
レベル5：実習生（自分）は、項目の内容について正しく適切に理解しており、実習生（自分）自身の対人関係のあり方の一部として実践している。	5
レベルN：今回の実習では項目の内容を行わなかった、現在実習継続中であるがまだ行っていない。	0

分類ごとに各設問における評価結果と点数化し、単純平均をとったのが表－4である。その結果、どの分類項目においてもレベル3にはほぼ達していることが伺える。

表－4　調査内容の調査項目分類別評価点平均

	分類名	評価点
A	基本的・社会的能力	3.8
B	実習準備態勢	3.3
C	実習計画並びに実習計画の実行など	3.3
D	ソーシャルワークコンピテンシー	3.2
E	ソーシャルワーク実践プロセス	3.3
F	書く・話す・聴く・観察する技能	3.3

また、【参考資料－2】に示す各設問の達成レベルにおいて、達成レベル（評価点）の高い設問および低い設問を整理したのが表－5である。

表－５　達成レベルの高い設問および低い設問

	設問内容（点数）
評価点の高い設問（平均 4.0 以上）	A-3 身なり (4.1) A-5 期日遵守 (4.1) D-33 守秘義務の理解と実践 (4.2)
評価点の低い設問（平均 3.0 未満）	B-11 実習先のシステムの把握 (2.9) B-12 ソーシャルワークとケアワークの違いの理解 (2.9) D-22 ソーシャルワーク実践 (2.9) D-23 社会ニーズの理解と実践 (2.9) D-24 専門性の理解と実践 (2.9) E-30 アセスメントスキル (2.5) E-31 チームアプローチ (2.8) F-43 面接技術の習得 (2.5)

注）設問内容の名称は略称

２）属性要素（性別、学年、実施前／中／後、実施施設）における評価の傾向

次に先の表－４における分類別評価点を①性別（設問２）、②学年別（設問３）、③実施前後別（設問５）、④実施施設別（設問６）とのクロス集計により傾向の差異を分析することにする。所属（設問１）と年齢（設問４）は回答数が一つの選択肢に集中しているため、分析の対象から除外する。（詳細は【参考資料－３】を参照）

①性別（設問２）

男性１６９人(26.5%)、女性４６９人(73.5%)の結果を表－６に示す。

表－６　調査内容の調査項目分類別評価点平均（性別）

	分類名	評価点（平均）		
		男性	女性	全体
A	基本的・社会的能力	3.8	3.9	3.8
B	実習準備態勢	3.3	3.3	3.3
C	実習計画並びに実習計画の実行など	3.2	3.3	3.3
D	ソーシャルワークコンピテンシー	3.2	3.2	3.2
E	ソーシャルワーク実践プロセス	3.3	3.3	3.3
F	書く・話す・聴く・観察する技能	3.3	3.3	3.3

性別による評価点の差は、ほとんど見られなかった。

②学年別（設問３）

２年生６３人(9.8%)、３年生４６７人(72.7%)、４年生１１２人(17.4%)であった（表－６）

表－６　調査内容の調査項目分類別評価点平均（学年別）

	分類名	評価点（平均）			
		２年生	３年生	４年生	全体
A	基本的・社会的能力	3.6	3.8	4.0	3.8
B	実習準備態勢	3.0	3.3	3.4	3.3
C	実習計画並びに実習計画の実行など	2.9	3.3	3.4	3.3
D	ソーシャルワークコンピテンシー	2.8	3.2	3.3	3.2
E	ソーシャルワーク実践プロセス	2.8	3.3	3.4	3.3
F	書く・話す・聴く・観察する技能	2.9	3.3	3.5	3.3

この結果よりどの分類項目においても、学年が高いほど達成した評価レベルが高いと考えられる。

③実施前後別（設問５）

実習開始前４８人(7.5%)、継続中２８人(4.4%)、実習終了後５６４人(88.0%)の結果を表－７に示す。

表－７　調査内容の調査項目分類別評価点平均（実施前後別）

	分類名	評価点（平均）			
		開始前	継続中	終了後	全体
A	基本的・社会的能力	3.6	3.9	3.9	3.8
B	実習準備態勢	3.0	3.1	3.3	3.3
C	実習計画並びに実習計画の実行など	2.8	3.0	3.3	3.3
D	ソーシャルワークコンピテンシー	2.8	3.0	3.2	3.2
E	ソーシャルワーク実践プロセス	2.7	3.1	3.3	3.3
F	書く・話す・聴く・観察する技能	2.9	3.2	3.3	3.3

この結果より、どの分類項目においても、実習前より終了後の方が達成した評価レベルが高いことが伺える。但し、同一人物での前後比較ではない。

④実施施設別（設問６）

実習先として多かった次の６施設別の結果を表－８に示す。

1　福祉事務所、児童相談所等の相談機関　４８人(7.6%)

2　社会福祉協議会　４９人(7.8%)

3　児童福祉法関連施設　１５１人(24.0%)

4　老人福祉法関連施設　１８６人(29.5%)

5　身体障害者福祉法関連施設　３９人(6.2%)

6　知的障害者福祉法関連施設　６４人(10.2%)

表－８　調査内容の調査項目分類別評価点平均（実習施設別）

	分類名	評価点（平均）						
		1	2	3	4	5	6	全体
A	基本的・社会的能力	4.1	3.8	3.8	3.7	4.0	3.8	3.8
B	実習準備態勢	3.6	3.2	3.3	3.2	3.4	3.3	3.3
C	実習計画並びに実習計画の実行など	3.6	3.3	3.3	3.2	3.4	3.3	3.3
D	ソーシャルワークコンピテンシー	3.4	3.2	3.2	3.1	3.2	3.2	3.2
E	ソーシャルワーク実践プロセス	3.5	3.2	3.4	3.1	3.4	3.3	3.3
F	書く・話す・聴く・観察する技能	3.6	3.2	3.3	3.2	3.6	3.3	3.3

全ての類項目においても、施設１で実習を受けた学生の達成した評価レベルが高いことが伺える。

３）再検討項目（回答しづらい項目や理解しづらい項目など）の抽出

各評価項目における理解レベルを表－９の換算表に従い点数化を行い定量的分析を行った。

表－９　理解レベルの点数換算表

理解レベル（選択肢）	評価点
レベル１：ほとんど理解できない。	1
レベル２：やや理解できない。	2
レベル３：やや理解できた。	3
レベル４：よく理解できた。	4

分類ごとに各設問における評価結果と点数化し、単純平均をとったのが表－１０である。その結果、全ての設問においてレベル３にはほぼ達していた。

表－１０　調査内容の調査項目分類別評価点平均

	分類名	評価点
A	基本的・社会的能力	3.6
B	実習準備態勢	3.3
C	実習計画並びに実習計画の実行など	3.5
D	ソーシャルワークコンピテンシー	3.2
E	ソーシャルワーク実践プロセス	3.2
F	書く・話す・聴く・観察する技能	3.4

また、【参考資料－２】に示す各設問の達成レベルにおいて、理解レベル（評価点）の低い設問を整理したのが表－１１である。

表－１１　達成レベルの高い設問および低い設問

	設問内容（点数）
評価点の低い設問（平均 3.0 未満）	B-12 ソーシャルワークとケアワークの違いの理解 (2.9) E-30 アセスメントスキル (2.7) E-31 チームアプローチ (2.8)

注）設問内容の名称は略称

４）自由意見による調査に対する具体的意見

調査における改善の検討材料と得ることを目的に、設問９において調査の項目の内容、項目の立て方等についての意見を記入する設問を用意したところ８４件の意見が得られた。（【参考資料－４】参照）

それを意見内容で分類すると次の８つに大別され、各々における意見の多かった内容を整理したのが表－１２である。

表－１２　自由意見の分類と主な意見

意見分類	多かった意見
1. 実施目的・主旨	調査に何の意味があるのかわからない（×）
2. 基準（適切とは）	どのレベルが「的確な」「適切な」であるのか判断が難しい（×）
3. 基準	評価基準が長くまわりくどい（×）
4. 文章表現	専門用語などあり、また設問の表現が難しい（×）
5. 項目数	項目数が多い（×）
6. 再確認	自分は何ができて何ができないのか再確認ができた（○）
7. 時期	実習前だと回答できない設問が多い（×）
8. その他	略

この結果より、あいまいな基準の設問や難解な表現の設問があり、人によって判断レベルが異なる場合が考えられる。

（５）考察並びに結論

以上の調査から、以下の考察が導きだされた。①　設問文および評価基準のあいまい表現の見直しが必要である。例えば、「適切な」「効果的な」といった形容詞的表現を、具体的な行動の表現に改める必要がある。②　妥当性の検証：実際に実習機関の担当者や回答した学生へのヒアリングなどを実施し、合理的な説明がつくかその妥当性を検証する必要がある。③　評価点の算出方法の検討：評価基準のスコア換算、重要度に応じた項目間の重みやA～Fの分類間における重みの設定、複数人による評価の場合の評価者間重みの設定が再調査の段階として必要となる。

今回の学生を対象とした調査では、コンピテンシーという言葉そのものへの浸透度が低く、学生も混乱していた。しかし、自由記述の中に、コンピテンシーの目的そのものである「自分は何ができて、何ができないのか再確認できた」という回答もあるように、コンピテンシーを利用した実習前後評価は、今後再検討が必要ではあるが、有用であると考える。また、調査項目については、再度検討の必要があり、中項目毎に項目間の相関をとり、相関の高いものについては項目を合体させる等の対応を今後行う予定である。

コンピテンシーの特徴は、専門能力をいかに向上させるかということにある。ただ単に

業務を整理することだけがコンピテンシーではなく、卓越した高業績者の知見をいかに一般化していくかということを業務評価と併せて捉えていくことであり、業績評価が行えないものはコンピテンシーとはいえない。

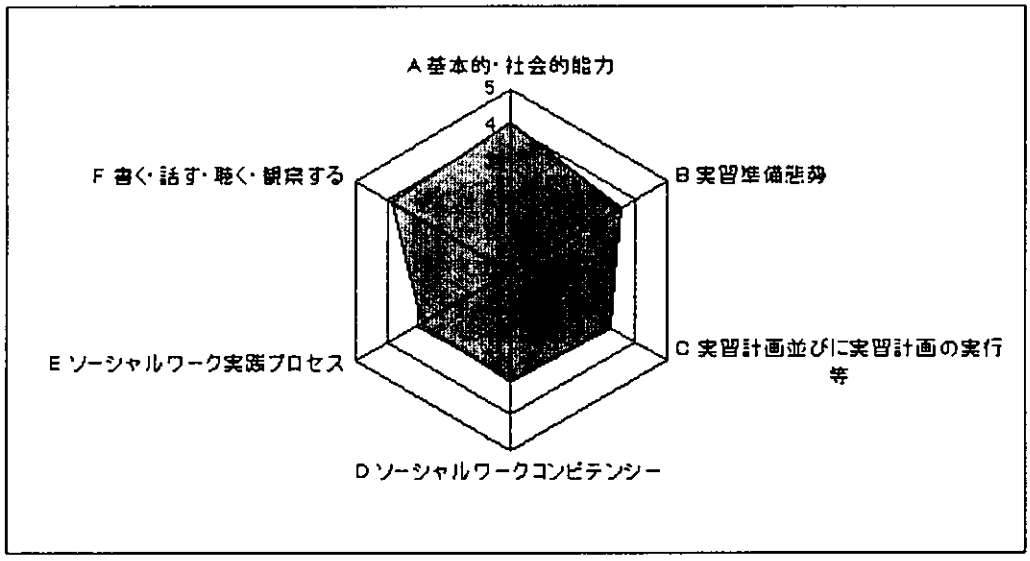
今回は調査データ数に隔たりがあるため、詳細な分析を行わなかったが、養成校間での比較ができることがコンピテンシーの特徴の一つでもある。個人のコンピテンシー比較だけではなく養成校間比較を行うことで、養成校における社会福祉士教育の状況を把握できるということは大きな特徴である。本研究はまだ始まったばかりであり、コンピテンシーという概念そのものが社会福祉分野では理解されていないことから、すぐに実用化できるとは思わない。しかし、今後の社会福祉士教育における有用な可能性を示唆できるものとして報告したい。

なお、本研究は最終的にはホームページ上に調査票を設置し、コンピュータで各学生が評価を行え、それをビジュアルで確認できるような仕組みを構築する予定である。そのイメージは以下のとおりである。

実習後コンピテンシー評価結果

大学：○○大学　学部：△△　学年：3年　氏名：○山　○男

	分類名	評価点	
		1回目	2回目
A	基本的・社会的能力	4.1	
B	実習準備態勢	3.5	
C	実習計画並びに実習計画の実行等	3.2	
D	ソーシャルワークコンピテンシー	2.8	
E	ソーシャルワーク実践プロセス	2.9	
F	書く・話す・聴く・観察する	3.8	



（6）まとめ

コンピテンシー調査の特徴には、①点数化されているために比較が学生自身の実習前、実習中、実習後の変化を把握しやすい、②同じく点数化されているため、他の社会福祉士養成校等と比較して、所属養成校の状況を客観的に把握できる、③学生が達成感を得やすい、④実習指導者間の比較が行いやすい、等がある。

コンピテンシーは企業でも近年急速に取り入られるようになった概念であり、未だ十分に浸透しているとはいえない。一歩間違えれば、誤ったコンピテンシー観を有している場合もあるが、コンピテンシーという概念そのものは昨年度の報告書においても述べたように、何をもってその専門職の特性とするか、何ができるとその専門職として有用であるか等を明確にしていくことである。専門性が曖昧であると指摘されているソーシャルワーク分野において、コンピテンシー概念を導入することは、今後ソーシャルワーク専門教育のみならず、ソーシャルワーカーの専門性そのものにも寄与するものと考える。

【参考資料－１】

厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業

社会福祉援助技術現場実習のコンピテンシーに関する調査票案（Ver. 3）

（社）日本社会福祉士養成校協会では、平成１５年度厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業の配分を受け、「社会福祉士専門職教育における現場実習教育に関する研究」を実施しております。本調査は、この研究の一環として、社会福祉援助技術現場実習を履修する学生のコンピテンシーを調査し、社会福祉援助技術現場実習の質の向上を図ることを目的として実施するプリサーベイです。本調査結果の分析から、学生自らがコンピュータ入力をして、自分で社会福祉援助技術現場実習前、実習中、実習後の学生のコンピテンシーを計ることができるようにする予定です。

本調査は無記名で実施します。成績等に利用することはありませんので、率直にご記入下さい。

学生の皆様の御協力をお願い申し上げます。

設問１　あなたの所属であてはまるもの一つに○印をつけて下さい。

1　大学院　2　大学　3　短期大学　4　通学制社会福祉士養成校　5　通信制社会福祉士養成校
6　社会福祉士養成校以外の専門学校　7　その他（具体的に：　　）

設問２　あなたの性別は？

1　男　2　女

設問３　あなたの学年は？

1　1年次　2　2年次　3　3年次　4　4年次

設問４　あなたの年齢は？

1　10代　2　20代　3　30代　4　40代　5　50代以上

設問５　実習は終了しましたか？

1　実習開始前
2　実習継続中（実習と実習の間の空き期間を含む）
3　実習終了後（年度内の実習終了後）
4　その他（具体的に：　　）

設問６　どの種別に実習に行きましたか？１カ所の種別に実習に行った場合は、当てはまる種別に○印を記入して下さい。異なる種別に２回以上実習に行った場合は、「9」に○をして下さい。

1　福祉事務所、児童相談所等の相談機関　2　社会福祉協議会　3　児童福祉法関連施設
4　老人福祉法関連施設　5　身体障害者福祉法関連施設　6　知的障害者福祉法関連施設
7　生活保護法関連施設　8　売春防止法関連施設　9　異なる種別において複数回の実習を行った
10　その他（具体的に：　　）

設問7　学生は自分自身の評価を適切な評価項目に○印を記入してください。評価は以下の基準に従って下さい。また、実習開始前の評価は、自分の普段の生活や学校での学習等から答えられる項目について回答して下さい。実習継続中の場合は、その段階における評価を行って下さい。実習終了後の評価は、実習終了後の回答時点に実習において学習したこと等を踏まえて、回答してください。

1　実習生（自分）は、項目の目的をほとんど理解していないし、それを実践できない。
2　実習生（自分）は、項目の内容を理解しているが、それを実践できない。
3　実習生（自分）は、項目の内容を理解しており、それを適切に実践する努力をしているが、もっと訓練が必要である。
4　実習生（自分）は、項目の内容を理解し、意識的に実践している。
5　実習生（自分）は、項目の内容について正しく適切に理解しており、実習生（自分）自身の対人関係のあり方の一部として実践している。
N　今回の実習では項目の内容を行わなかった、現在実習継続中であるがまだ行っていない。

分類	分類名	No		評価
A	基本的・社会的能力	1	適切な礼儀が身についている	1 2 3 4 5 N
		2	相手に応じた適切な話し方をする	1 2 3 4 5 N
		3	適切な身なりや服装をする	1 2 3 4 5 N
		4	心身ともに適切な状態を維持している	1 2 3 4 5 N
		5	課題等を期日までに提出するよう行動している	1 2 3 4 5 N
		6	自分の苦手な人を避けたりせず、誰とでも協調性を持って接する	1 2 3 4 5 N
B	実習準備態勢	7	自己覚知ができるよう努力している	1 2 3 4 5 N
		8	様々な体験を自分なりに受け止め、その体験を解釈し、自らの行動につなげている	1 2 3 4 5 N
		9	同じ失敗を何度も繰り返さないように取り組む姿勢がある	1 2 3 4 5 N
		10	実習先施設等についての情報収集をしており、実習先施設等について理解し、施設等のイメージを把握している。	1 2 3 4 5 N
		11	実習先施設等の内外の関連するシステムについて把握している	1 2 3 4 5 N
		12	ソーシャルワーク実践とケアワーク実践、保育実践等との違いを理解している	1 2 3 4 5 N
		13	自分なりの問題意識を持ち、実習についてのモティベーションを持っている	1 2 3 4 5 N
C	実習計画並びに実習計画の実行等	14	実習目標が明確である	1 2 3 4 5 N
		15	的確に実習計画書を作成する	1 2 3 4 5 N
		16	実習計画を意識した行動をとる	1 2 3 4 5 N
		17	的確に実習計画の変更を行う	1 2 3 4 5 N
		18	自分の日々の実習目標に関する成果を的確に評価する	1 2 3 4 5 N
		19	実習終了時に、自分の全体の実習目標に関する成果を的確に評価する	1 2 3 4 5 N
		20	その日の実習体験内容の他に一日の実習の反省点、感想、指導を受けたこと、疑問点等についてまとめている	1 2 3 4 5 N
		21	実習中の不安やトラブルに的確に対応する	1 2 3 4 5 N